様式Ｃ-7-2

# 自己評価報告書

平成２２年５月１日現在

研究種目：基盤研究（A）
研究期間：2007～2010
課題番号：19201049
研究課題名（和文）　現代アメリカ・ナショナリズムの複合的編制をめぐる学際的研究
研究課題名（英文）　An Interdisciplinary Study of Contemporary American Nationalism with Special Attention to Its Multiple Components

研究代表者
古矢　旬（FURUYA JUN）
東京大学・大学院総合文化研究科・教授
研究者番号：９００９１４８８

研究代表者の専門分野：社会科学
科研費の分科・細目：複合新領域・地域研究
キーワード：ナショナリズム、帝国、宗教、憲法、国際比較、テロリズム、原理主義、反米主義

## １．研究計画の概要

冷戦以後、とりわけアメリカ中枢をおそった「9. 11 事件」以後、比類のない軍事力を背景とする唯一の超大国アメリカ合衆国（以下、アメリカと略称）の国際的行動は、しばしば単独行動主義へと傾き、国際政治における伝統的な国家間関係のあり方を大きく揺るがす結果となった。本研究は、時として現代の「帝国」とすら目されるアメリカの国家行動が、いかなるイデオロギー・社会心理・世界観に基づくのかという問題に、アメリカ・ナショナリズムの構造と動態の両面に目配りしつつ接近を図るものとしてスタートした。そこで本研究では、アメリカ・ナショナリズムを、政治的・憲法的な統治原理、人種的・エスニック的な社会関係、宗教の政治的影響力という三つの最も主要な要因に分かち、それぞれの再検討を経たうえで、それら個別研究の成果をつきあわせ新たなデータを取り入れながら、アメリカ・ナショナリズムの全体像を再構成することを最終的な目的としている。したがって本研究の方法は自ら多領域横断的、学際的な性格をもっている。

こうした目的・方法にしたがって研究を推進しつつ、本研究は同時に、21 世紀初頭の紛争と混乱に満ちた国際社会の動向を通して、アメリカ理解を深化させることによって地域研究としてのアメリカ研究の視野の拡大と方法論的革新に寄与することをも目指している。

## ２．研究の進捗状況

その出発に際し、本研究では研究分担者を「A　ナショナリズム研究」担当および「B　表象研究」担当の２群に分かち、A群には、政治的ナショナリズム班、人種（エスニック）的ナショナリズム班、宗教的ナショナリズム班、B群にはアメリカの自己表象班、アメリカの対外関係班、外部世界のアメリカ表象班の各３班を設けた。各分担者は、これまで各班毎に個人研究を進めてきており、その成果は以下３および５に挙げるとおりである。

これらの個別の研究成果とは別に、本研究では、全体研究の進捗度を確かめるために、各年度においてシンポジウム、研究会、ワークショップを国際的な研究交流をはかりつつ実施してきている。過去３年間に“Anti-Americanism: History and Structure”(2007年9月29日)“American Nationalism and Empire in an Age of Globalization”（2008年3月1、2日）、「アメリカ太平洋とイギリス帝国」(2008年9月13日)、「オバマと世界――何が変わったのか？」(2009年10月3日)と４度の国際シンポジウムを開催している。こうした場において、またそれらのシンポジウム研究会の記録を公刊することを通して、本研究の中間的成果の公開をはかるとともに、内外の同分野、隣接分野の研究者との意見交換も積極的に推進してきている。

## ３．現在までの達成度

②おおむね順調に進展している。

（理由）

これまでに展開されてきた各班、各分担者の個別研究成果として、アメリカ・ナショナリズム関連の書籍、各種資史料の収集による

ライブラリー構築のほか、上記A群関係ではエスニック・マイノリティや若年層における近年の政治意識や自己アイデンティティの変容に関する実証的な調査、国家やナショナリズムの枠内に発しながらその枠を越えて活動を展開してきた（例えばキリスト教宣教師のような）トランスナショナルな活動主体の研究、オバマ政権の登場が物語るアメリカ・ナショナリズムの変容に関する研究などがいちじるしい進捗をみている。またB群関連では、ヨーロッパ、ラテン・アメリカから見たアメリカの「自決」論の意義と限界の究明、冷戦期アメリカの核戦略のイメージとインパクトをめぐる研究、第二次世界大戦後の「占領期」における日米宗教観の違いがもたらす影響理解が具体的な進捗をみている。さらにこれらいずれの問題との関連においても、宗教的要因の重要性が明らかにされつつある。最終年を迎えて、各班毎の研究成果が一つの全体研究へと集約されつつある段階である。

４．今後の研究の推進方策

以上の研究成果をとりまとめ、統一的報告書、国際シンポジウム開催によってアメリカ・ナショナリズムの歴史的全体像を提出することが最終的な課題となる。そのために夏前には，研究分担者全員の参加する研究会を開き，従来の研究経過の総括とこれまでの個人、班、全体研究を通して発見された新たな研究課題や問題群の検討を行う。10月以降には、３度の全体会議において全研究分担者が研究報告をおこない、相互批判を通して最終報告書への提出論文を練り上げてゆく。

５． 代表的な研究成果

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　８８件）

１．廣部泉「国際連盟知的協力国際委員会の委員選考過程と新渡戸稲造」『明治大学教養論集』441号(2009) 、39-53ページ、査読有

２．Toru Onozawa, ”The Search for an American Way of Nuclear Peace: The Eisenhower Administration Confronts Mutual Atomic Plenty” *The Japanese Journal of American Studies* (2009), pp. 27-46、査読有

３．古矢旬「オバマ政権の政治的課題」『生活経済政策』、No.147 (April 2009)、8-12ページ、査読無

４．廣部泉「来日アメリカ人宣教師の越境と日米関係：シドニー・L・ギューリックにみる越境と文化変容」『同志社アメリカ研究』45号(2009) 25-38ページ、査読有

５．久保文明「オバマ政権の外交政策と沖縄について」『季刊沖縄』37号(2009)、1-10ページ 査読無

６．古矢旬「オバマ大統領の誕生と変貌するアメリカ――大統領就任演説にみるオバマの政治姿勢」、『月刊マスコミ市民』、482 号(2009年3月号)、60-70ページ 査読無

７．古矢旬「オバマは何を変えたのか」、『外交フォーラム』、2009 年 2 月号、64-70 ページ 査読無

８．久保文明「G.W.ブッシュ政権の環境保護政策－地球温暖化問題を中心に」『国際問題』572号（2008)、33-45ページ 査読無

９．古矢旬「アメリカの対外介入――歴史的概観」、黒木英充編『「対テロ戦争」の時代の平和構築』東信堂、2008年8月30日、165-85ページ 査読無

１０．古矢旬「2008 年選挙の歴史的位相」、『外交フォーラム』、No. 237 (2008年4月号)、14-19 査読無

１１．古矢旬"A New Perspective on American History from the Other Side of the Pacific," *The Japanese Journal of American Studies*, No. 18 (June 2007): 59-71ページ 査読有

１２．古矢旬「アメリカニズムと暴力」、『権力と暴力』（シリーズ・アメリカ研究の越境、第2巻)、ミネルヴァ書房、2007年、1-14ページ 査読無

〔学会発表〕（計　１２件）

〔図書〕（計　２６件）

１．古矢旬（大澤真幸・姜尚中編)、有斐閣、『ナショナリズム論・入門』、2009年、293-314ページ

２．古矢旬，岩波書店、『ブッシュからオバマへ　アメリカ変革のゆくえ』、2009、280ページ

３．久保文明編、ウェッジ、『オバマ政権のアジア戦略』、2009，265ページ

４．久保文明、アスペクト、『オバマで変わるアメリカ　日本はどこへ行くのか』、2009、304ページ

５．久保文明『新しいリベラリズム：台頭する市民活動パワー』ミネルヴァ書房、2009、334ページ

６．中山俊宏、文化書房博文社、『国際化する地域研究』、2009、170-182ページ

７．大津留（北川）智恵子（菅英輝編)、『アメリカの戦争と世界秩序』

８．大津留（北川）智恵子　（共著)、晃洋書房、『躍動するコミュニティ－マイノリティの可能性を探る』、2008、412ページ